

小学 5、6 年生の喫煙、受動喫煙、歯周病、加熱式タバコに 対する意識や脱タバコ教育講義の効果

増田 麻里 (G180008)

指導教員：土田 満

キーワード：小学生、喫煙、歯周病、加熱式タバコ、脱タバコ教育講義

はじめに

2017 年国民健康栄養調査によると、成人の喫煙率は 17.7% (男性 29.4%, 女性 7.2%) で¹⁾、中学生では 2018 年の飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査によると喫煙の生涯経験率は全体の 2.2% (男性 2.8%、女性 1.5%) と減少傾向にある。しかし、2016 年歯科疾患実態調査では、4mm 以上の歯周ポケットを持つ者の割合は、小学校高学年から中学生 (10～14 歳) は 24.6%であり、これらの歯肉炎有病者がタバコによる健康障害を受けることにより、歯肉炎の悪化、将来の歯周病患者の増加に繋がる可能性がある。また、2017 年に中高生の喫煙行動に関する全国調査を行い、紙巻タバコだけでなく、加熱式タバコや電子タバコの使用が明らかとなった。現在、加熱式タバコは 40 カ国以上で販売され、世界保健機関 (WHO) は、2019 年に加熱式タバコを紙巻タバコと同様に規制対象とする必要性を述べている。2014 年の未成年者の健康課題および生活習慣に関する実態調査研究では、中学生の喫煙経験率は、男女とも学年が上がるにつれ上昇し、多くが小学校高学年から中学にかけて喫煙を開始したと報告しており、小学生時期での喫煙開始対策を行う必要が示唆される。家族を含めた社会全体が喫煙の害について病識が欠如している「社会的ニコチン依存」の状態は、「喫煙を美化、正当化、合理化し、またその害を否定することにより、文化性を持つ嗜好品として社会に根付いた行為と認知する心理状態」と定義され、その評価として加濃式社会的ニコチン依存度調査票 (Kano Test for Social Nicotine Dependence: 以下 KTSND とする) が用いられる。KTSND は、喫煙者だけでなく非喫煙者にも評価可能な質問票であり、得点が高いほど喫煙を容認する

傾向が高いと評価される。KTSND に関する報告は成人だけでなく、小学生を対象とした KTSND 調査票小学校高学年標準版 (KTSND-youth) (表 1) を用いた報告もあるが、成人と比較が少ない。未成年時期での喫煙開始対策として、小学校高学年時期にタバコの本質や依存症とそのメカニズムの教育、喫煙と受動喫煙の健康障害を教育する「脱タバコ教育講義」が行われているが、社会の変遷と共にその内容を変化させ、喫煙開始対策推進への基礎資料を蓄積させる必要がある。

目的

KTSND-youth を用いて、小学校 5、6 年生に対して、歯周病に与える悪影響の認知と加熱式タバコによる健康障害の認知を加えた喫煙や受動喫煙および喫煙に関する認知を調査し、脱タバコ教育講義が喫煙に対する認識におよぼす影響について調査した。

対象および調査方法

対象は、2017 年 2 月～2018 年 2 月の間に脱タバコ教育講義と質問票調査を行った愛知県内の小学校 6 校の児童 515 名 (男児 238 名、女児 270 名、5 年生 125 名、6 年生 390 名) である。調査方法は、脱タバコ教育講義は、全て同じ日本禁煙学会専門医 1 名が行い、その内容は、タバコの本質、依存症とそのメカニズム、喫煙と受動喫煙の健康障害、歯周病との関連、加熱式タバコについておよび喫煙開始対策で、その講義前後で質問票の番号を一致するようにして喫煙に対する意識の変化を対応させて比較した。

結果

愛知県内の小学校 6 校の児童に、脱タバコ教育講義と質問票調査を行い、喫煙状況と KTSND-youth に記入漏れがない 496 名をデータ解析した。周囲の

喫煙者は、父親の喫煙率が最も多く（26.0%）、喫煙願望（10%）、喫煙経験（0.2%）のある者もいた。喫煙、受動喫煙による健康障害の認知、ニコチンの依存性、勉強や運動への影響を認知している者は、80%以上の児童が認知し、歯周病に与える悪影響の認知（76.4%）と、加熱式タバコによる悪影響の認知（56.2%）は、いずれの項目と比較して低値であった。

表1 KTSND 調査票小学校高学年標準版

質問項目
1.タバコを吸う人はやめたくてもやめられないでいると思う
2.タバコを吸うことは大人っぽくてカッコいいと思う
3.タバコはお茶やコーヒーのように味や香りを楽しむためのものだと思う
4.タバコを吸う生活も大切にするほうが良いと思う
5.タバコを吸うと生活が楽しくなることもあると思う
6.タバコを吸うと、からだや気持ちにいいこともあると思う
7.タバコを吸うと気分がスッキリすることもあると思う
8.タバコを吸うと、頭の働きがよくなると思う
9.お医者さんや学校の先生は『タバコを吸ってはダメ』と言いつぎと思う
10.灰皿が置いてあるところなら、タバコを吸ってもよいと思う

講義前後の将来の喫煙や喫煙経験予想は、講義前後の将来の喫煙予想「将来タバコを吸っていると思う」「将来タバコを1度でも吸うと思う」は、どちらも講義前に比べて講義後で有意に低下した。講義前歯周病認知有無別 KTSND-youth の中央値は、全小学校（認知あり 3.0、認知なし 3.0）と全小学校女児（認知あり 3.0、認知なし 3.0）で認知の有無で統計的に有意な関連が認められ、全小学校男児では認められなかった。講義後歯周病認知有無別 KTSND-youth の中央値は、全小学校（認知あり 0.0、認知なし 2.0）で認知あり群は、認知なし群に比べて低く、全小学校男児、女児ではその傾向は認められなかった。全小学校における歯周病認知あり群の KTSND-youth 得点は、講義後で有意に低下した。講義前加熱式認知有無別 KTSND-youth の中央値は、全小学校（認知あり 2.0、認知なし 4.0）、全小学校男児（認知あり 3.0、認知なし 4.0）、全小学校女児（認知あり 2.0、認知なし 3.0）で認知あり群は、認知なし群に比べて低かった。各小学校男女で KTSND-youth の中央値を比較すると、全小学校における加熱式認知あり群の

KTSND-youth 得点は、男児に比べ女児の方が低かった。講義後加熱式認知有無別 KTSND-youth の中央値は、全小学校（認知あり 1.0、認知なし 2.0）、全小学校女児（認知あり 1.0、認知なし 2.0）で、認知あり群は、認知なし群に比べて低かった。男女で

KTSND-youth の中央値を比較すると、全小学校における加熱式認知あり群の KTSND-youth 得点は、男児に比べ女児の方が低かった。全小学校における加熱式タバコ認知あり群、なし群の KTSND-youth 得点は、講義前に比べ講義後の方が低かった。今後の脱タバコ教育講義は、喫煙が、歯周病に与える悪影響と、加熱式タバコによる健康障害を取り入れる必要性が示唆された。

考察

2020 年 4 月、健康増進法の一部改正により屋内原則禁煙は、加熱式タバコ専用喫煙室が認められる場合もある。平成 30 年度健康日本 21 中間報告書（案）概要では、成人の喫煙率の減少、受動喫煙の機会を有する者の割合の減少であるが、最終目標到達が危ぶまれている。2017 年患者調査によると、「歯肉炎及び歯周疾患」の総患者数は増加しており、タバコを吸わない未成年者でも、喫煙が歯周病のリスクファクターであることを認知することにより、受動喫煙を回避し、将来の喫煙者や歯周病患者の減少に繋がるといえる。世界保健機関（WHO）は、加熱式タバコの健康影響を評価できる情報はほとんどないと述べ、日本禁煙学会は加熱式タバコが、子どもと若者の喫煙を促進することを述べている。2019 年に実施した家族のたばこ意識調査で、タバコを吸っている子どもがいる割合は、非喫煙者で低く、喫煙者で高かった。喫煙経験は、受動喫煙のある児童はない児童の 3 倍、高いという報告もあり、家族のタバコへの認識は子どもの喫煙経験に影響を与える可能性がある。本研究で、歯周病に与える悪影響と加熱式タバコによる健康障害の認知は、講義後で低下した。よって、今後の脱タバコ教育講義は、喫煙の歯周病に与える悪影響と、加熱式タバコによる健康障害を講義内容に取り入れ、その認知度を講義前後で比較する必要性が示唆された。

参考文献

1) 厚生労働省：2017 年国民健康・栄養調査結果の概要, <https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000351576.pdf>, 2019 年 9 月 21